４．２８ 講演会

『普天間米軍基地の
県外移設を考える』

【日　時】　２０１３年４月２８日（日）　１４：００～１７：００
【場　所】　大正沖縄会館
　　市バス平尾下車平尾交差点を東へ徒歩３分
【参加費】　１，０００円

【内　容】　Ⅰ部　講演　高橋哲哉氏
　　Ⅱ部　質疑・討論
　　Ⅲ部　パネルディスカッション
　　野村浩也 × 知念ウシ × 高橋哲哉

【問合せ】　関西沖縄文庫　０６－６５５２－６７０９
　　（大阪市大正区小林東３－１３－２０）

★高橋 哲哉（たかはし てつや）氏 プロフィール

1956 年福島県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得。専攻は哲学。南山大学講師等を経て、東京大学大学院総合文化研究科教授。著書に『逆光のロゴス』『記憶のエチカ』『デリダ』『戦後責任論』『歴史／修正主義』『「心」と戦争』『証言のポリティクス』『〈物語〉の廃墟から』『反・哲学入門』『教育と国家』『靖国問題』『国家と犠牲』『状況への発言』など。

最新刊に『犠牲のシステム　福島・沖縄』（集英社新書）、『いのちと責任』（高史明氏との共著、大月書店）がある。

沖縄タイムス 2013.1.10
第3種郵便物認可

年始評論

高橋 哲哉

改憲より差別解消を

棚上げの沖縄・福島を危惧

昨年末の総選挙で自民党が圧勝し政権に復帰した。暦も改まり人心一新の気が満ちているかといえば、そうでもない。民主党に失望し消去法で自民党を選んだが、勝たせすぎたと思っている有権者は多い。安倍政権は、自民党の政策が「圧勝」したわけではないことをまずは肝に銘ずるべきであろう。

私はとくに沖縄と福島が気になっている。

民主党政権は、鳩山内閣が米軍普天間飛行場の県外移設を掲げて挫折した後、辺野古移設案に回帰し、新型輸送機MV22オスプレイの沖縄配備を強行した。いずれも沖縄の圧倒的民意に反しており、沖縄では本土に対する不信、「沖縄差別だ」という憤りが頂点に達している。

東京電力福島第1原発事故については、野田内閣が「冷温停止状態」なる奇妙な言葉で無理やり「収束」を宣言し、これまた脱原発の世論に反して、大飯原発の再稼働や大間原発の建設再開を認め、2030年代原発ゼロ計画の閣議決定を事実上見送った。今なお16万人が避難を強いられ、多くの県民が放射能の被曝の不安を抱えて暮らす福島からも、「私たちは日本国民なのか。棄民政策ではないか」という声が聞こえてくる。

たかはし・てつや 56年福島県生まれ。東大教授。専攻は哲学。著書に「靖国問題」「犠牲のシステム 福島・沖縄」など。

差別ではないかと問う沖縄の声。棄民ではないかと問う福島の声。しかし、総選挙では、これらの問題はほとんど争点化されなかった。各政党は先を競って「日米同盟強化」を唱えたが、それと沖縄の民意との矛盾には沈黙した。県外移設を語った一部の党は、軒並み議席を減らした。

福島県では、年間の空間放射線量が20ミリシーベルト以下であれば居住可能という前提で「復興」が語られている。ウクライナなどの「チェルノブイリ法」では、5ミリシーベルト以上であれば強制移住、1ミリシーベルト以上であれば移住の権利が認められる、というのにである。

選挙前、5ミリシーベルト以上の地域の子どもを疎開させるべきではないかという市民団体の公開質問に対して、民主党は「いいえ」、自民党は「どちらともいえない」と回答し、維新の会は無回答だった。「はい」と答えたのは未来の党、社民党、緑の党だけだった。

沖縄や福島の問題に向き合うことなく「景気回復」や「憲法改正」をうたう政党が支持された総選挙。本当にこれでよいのか、と問わざるをえない。憲法改正を言う前に、深刻な人権侵害が続く沖縄や福島の現状を憲法原則に従って是正することこそ必要ではないか。

新たな衆議院では、憲法9条改正派が3分の2を超えたとも言われる。夏の参議院選挙の結果次第では、安倍首相は96条の改憲の発議要件緩和に着手し、9条改正に突き進む可能性がある。領土問題などで中国との緊張を高め、それを改憲に利用しようとする政治には警戒が必要だ。近隣諸国との政治的・軍事的な対立は日本にとって一利もない。

いまだに敗戦のルサンチマンから抜け出せず、「占領憲法」の改正や破棄を叫ぶような政治家には、何よりもまず沖縄を米軍による長年の「占領状態」から解放するように望んでおきたい。

第3種郵便物認可

「醜い日本人」現在に通用
なぜ沖縄は「祖国」選んだ

知念　ウシ

ちにん・うしぃ　1966年那覇市生まれ。むぬかちゃー（ライター）。著書に「ウシがゆく」など。

今回、「沖縄の日本復帰40年」を踏まえて先生にお手紙を書くにあたり、私が大学1年の時に読んだはずの先生のご著書「醜い日本人―日本の沖縄意識」を岩波現代文庫で読み返してみました。実は、失礼を承知で告白しますと、書名は覚えていましたが、内容は記憶していませんでした。理由を考えてみるに、当時の私には「いくら批判しても大人はどうせ日本をやめないんでしょ」という子どもの頃からの気持ちがありました。また、「これは私が生まれる前のことだから、今はちがう」とか「復帰したのだからよくなっているはずだし、そうでないなら、これからよくなるだろう」という「復帰進歩主義史観」（私の造語です）もあり、それらで思考停止していたからではないかと思います。

今回拝読して驚きました。1968年出版のこの本は今もまったく通用します。40年以上たっているのに、この本で先生が激しく批判する日本の政府、ジャーナリズム、知識人、文化人、そして一般国民のあり方は変わっていません。すなわち、依然として、「本土の人たちは、沖縄の犠牲のうえに繁栄を謳歌（おうか）してきたが」「本土側で沖縄の問題が『自分の問題』としてとらえられていない」からです。さらに先生は「はたしてこれが沖縄の人びとが好んで使う『祖国復帰』の名に値するものか、疑わざるをえない」とお書きです。

それなのに、なぜ、当時の人たちはそんな日本に「復帰」することを選んだのでしょうか。すみません、当時の複雑で込み入った状況、苦しみも知らず、簡単に聞くな、とお思いかもしれません。それでも、教えていただきたいのです。

「日本に戻る」という発想は、戦前の大日本帝国沖縄県時代がいいもので懐かしかったのでしょうか。

戦前の日本人にされたまま、敗戦を迎え、そのまま、「日本人だから日本に戻るのは当然」と思ったのでしょうか。

だとしたら、「醜い日本人」という本は沖縄の人の自己批判の本になっているはずです。しかし当時の沖縄の人も、そして今も、これは「かれら」のことであり、自分たちは「かれらの犠牲になっている立場」の人々だという意味がわかったし、わかるのではないかと思います。

米軍に占領され「沖縄屈辱の日」と呼ばれるサンフランシスコ講和条約で日本に捨てられて、沖縄では非常に怒っていたはずですが、それでも日本になりたい、というのは何だったのでしょうか。

「日本」というのは、現実の日本ではなく、何か別の、自分たちの上位概念、理念型、理想郷みたいなイメージだったのでしょうか。

復帰を訴える文書などに、「民族」という言葉が出てきますが、何民族のことかがわかりません。当時人々は、そして現在、先生は「ワッター、日本民族ヤンドー」と思いますか。

人権が踏みにじられる米軍占領支配から脱したい、人権を取り戻したい、という思いが、なぜ「日本になる、戻る」になったのでしょうか。文明や主権国家体制というのは、ヤマトゥから来る、という感覚があったのでしょうか。

化

復帰前後

つなぐ言葉

知念ウシ ←→ 大田昌秀 (上)

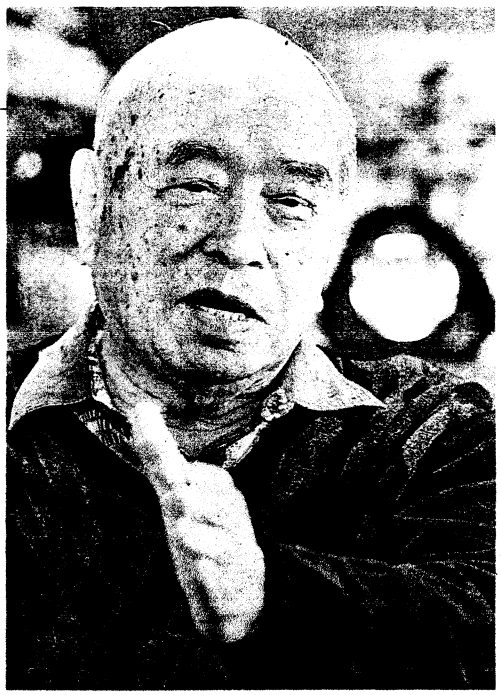
文化

復帰前後つなぐ言葉
―往復書簡

知念ウシ ←→ 大田昌秀 (上)

「平和憲法」「核抜き」願う
現実は「琉球処分」の再来

大田　昌秀



おおた・まさひで　1925年久米島生まれ。大田平和総合研究所主宰。元沖縄県知事、前参議院議員。

お手紙ありがとう。まず最初に一言。貴女が「ウシ」と名乗り、「カマドゥー小の会」を組織して基地問題などで活躍していることをうれしく思います。戦前に「方言撲滅運動」と軌を一にして、沖縄では改姓運動が起き、すべての「沖縄的なもの」は劣悪だとして抹殺されました。政府や県当局の指示によるもので、地元の指導者たちは皇民化を急ぐ余り、積極的にそれに呼応。その結果、女性たちは、ウシとかカメ、カマドといった名前を恥じて本土的な名前に変えました。若い世代の貴女があえて「ウシ」と名乗るのはユーモラスで、貴女の社会変革への意志が感得できます。

さて「復帰後40年」の節目を迎え、「日本復帰」とは何であったかがいや応なしに問われるとともに、沖縄は基地移設問題をめぐって、将来を見据えた主体性が問われています。その点との関連で、貴女は私の「醜い日本人」という本を読み、その論旨は現在も通用すると言い、何故に沖縄の人々は日本復帰を望んだのか、と問うています。お答えする前に付言しますと、私は「醜い日本人」を書く前に、自己批判の本として1967年に弘文堂新社から「沖縄の民衆意識」という本を出しました。それを一読されたら、伊波普猷やその弟の普成（月城）が「沖縄人の最大欠点」として酷評した私たち自身の主体性のない事大主義的生き方がいかなるものであったか、判然とすると思います。

復帰運動の過程では、復帰の内実が人々の志向したものと違い過ぎるため、思想的観点から「反復帰論」なども論じられました。こうして復帰をめぐっては、さまざまな議論が表面化しました。一言で言えば日本の近代が「西洋化の歴史」であったとすれば、沖縄のそれは「日本化＝皇民化の歴史」でした。復帰運動は「復帰運動の父」と言われる仲吉良光元首里市長が敗戦後の収容所内から米軍の隊長に日本復帰への要望書を出し、沖縄人は日本民族に他ならないから日本に復帰するのはごく自然だと心情的主張をして始まりました。講和会議の直前には日本復帰期成会が結成され、有権者27万6千人中72％の19万9千人が署名して吉田首相宛に送りました。

ついで基地から派生する事件・事故の多発や土地の強制収用なども絡んで、沖縄の人々の基本的人権が無視されると、「異民族支配からの脱却」というスローガンが強調され、あげく「平和憲法の下へ帰る」「核抜き本土並み」といった主張が唱導されました。中心になったのは、地元指導者や教職員会、組織労働者などでした。

ところが、いざ復帰してみると、あらゆる意味で期待外れとなり、第二、第三の「琉球処分」だと大方の怒りを買い、日本国家や平和憲法に幻想を抱いたとして、運動をリードした人たちが批判されるに至ったのです。

戦前の日本人にされたまま、敗戦後の日本人にされたのでしょうか。

う感覚があったのでしょうか。

沖縄タイムス・2017.3.9　第3種郵便物認可

沖縄の痛み 忘れている

4・28式典 広がる反発

「主権回復の日」として4月28日を祝う式典を開く安倍晋三首相の方針に、県内で反発が広がっている。沖縄無視、植民地扱いー。県民は戦後も続く苦難の歴史をひもとき、安倍政権の方針に強く非難の矛先を向けている。

（1面参照）

1955年に沖縄タイムスに入社し東京で記者をしていたフリージャーナリストの由井晶子さん(79)は、「沖縄が切り離された後、本土の人は沖縄を忘れ去っていた」と振り返る。

沖縄が意識されるのは50年代後半の「島ぐるみ土地闘争」を全国紙が報じてから。だがその後も〝基地の島〟への同情的な視線を向けるだけだった。「沖縄戦でひどい目に遭わせ、思い出したら同情だけ。半世紀以上たった今、切り捨てられた沖縄の痛みを、すっかり忘れている。4・28を祝うのはその象徴だ」と指摘した。

「沖縄無視の始まり」。県民の反対にもかかわらずオスプレイを強行配備し、普天間飛行場の県内移設を進める政府の変化を指摘。「50年代に忘れていたのはまだ許せるが、これだけ沖縄の要望を知りながら無視するのはがまんならない」と憤り、沖縄が反対を訴え続ける必要性を強調した。

普天間飛行場の大山ゲート前で抗議行動を続ける沖縄市の照屋秀伝さん(75)は「日本の主権は回復し、沖縄の多くの権利が奪われた」と皮肉を込める。米軍施政下の27年間、政治、経済、教育まで米国の圧力に虐げられてきたと振り返る。

オスプレイ強行配備など、復帰した今も状況は変わらないと感じる。「主権回復の日を認めれば、苦しんで亡くなった沖縄の先人が亡霊となって出てくる」と語った。

むぬかちゃー（ライター）の知念ウシさん(46)は「安倍首相をはじめ日本政府は、沖縄の歴史を十分知った上で式典を開催するつもりだろう。知らないはずはない」と考える。

「琉球国を武力併合した上に戦場にし、敗北すれば敵国に引き渡す。日本は、沖縄を植民地にしたから、自らの都合のいいように使う。そのようにして、現在も基地を押しつけている」と指摘。その上で「普天間基地の県内移設やオスプレイ配備に『オール沖縄』で反対する中、このような式典の企画、実施とは、沖縄を今後とも植民地にするという宣言だ」と話した。

キンザーなど初飛来

オスプレイ 浦添市が抗議

【中部・北部】米軍普天間飛行場のオスプレイ1機が8日午前8時10分ごろか

市）とキャンプ・コートニー（うるま市）を含む中北部の米軍基地に飛来した。両基

た訓練の一環とみられる。浦添市は同日、沖縄防衛局と米軍に電話で抗議した。

時半まで飛行するといったん日本側に通知した後、入試に配慮して午前9時55分までに終えると再度通知した。浦添市に6日に入った連絡では、近く予定される米海兵隊幹部の来県に備えた訓練という。

キンザーには、浦添市屋富祖、宮城、仲西などの各地域の上空を通り、国道58号東側から着陸。市当局は、

来てよかった

福島と沖縄と

――東日本大震災2年

福島で暮らす若者 佐藤夏美

「今回の測定で放射性物質は検出されませんでした」。今年1月、福島県相馬市の佐藤夏美(21)は、届いた内部被ばく測定評価報告書を読んだ瞬間、全身の力が抜けた。「よかった」。市が実施した2週間ほど前の検診結果に異常はなかった。日ごろ意識していない放射能が気になる瞬間だ。

ら高校卒業まで過
来は水泳に関わる

モズ
2

中城海上
県の許可を
域でモズク
たとして、
会社と、同社
30代の漁業
法違反など
検沖縄支部
た。2人は
やしたかっ
疑を認めて、
法なモズク
れたのは県
同保安部

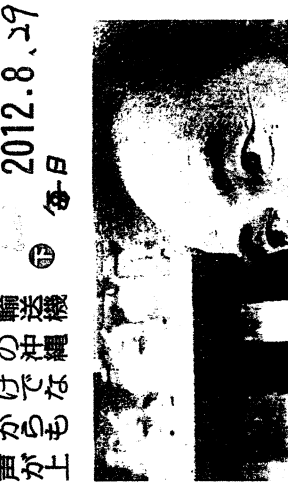
オキナワ
2012.8.29 毎日 (上)

「正しい」主張と疑問

「関西沖縄文庫」主宰 金城馨さん

米軍垂直離着陸輸送機MV22オスプレイの沖縄配備には、沖縄だけでなく全国各地の首長からも安全性への疑念の声が上がる。全国7ルートでの低空飛行訓練が予想されるためだ。だが、沖縄文化を発信する「関西沖縄文庫」（大阪市大正区）を主宰する金城馨さん(59)は、首長らの反応を冷ややかに見る。「目の前の危険を排除しようとする『正しい』主張だが、基地を押しつけられている沖縄と痛みを共有することはないだろう」

正しい、とされることにはいつも疑いの目を向けてきた。きっかけは、兵庫県内の高校に通っていた10代の出来事だった。在日コリアンの後輩に全校集会で本名を明かすよう勧めた。数百人の生徒を集めた、その当日。後輩は沈黙の末、一言も語らずに泣き崩れた。



きんじょう・かおる 85年、関西沖縄文庫を設立。沖縄関連の図書や資料を収蔵するほか、沖縄戦体験者からの聞き取りも続ける。

縁した差別問題研究会で、在日コリアンの後輩に全校集会で本名を明かすよう勧めた。数百人の生徒を集めた、その当日。後輩は沈黙の末、一言も語らずに泣き崩れた。

「『正しい』と考えてやったことが、当事者を傷つけることもある」。高校で抱いた悔悟の念は、20歳を過ぎて向き合うようになった基地問題にも通じてゆく。

米国統治下の沖縄本島に生まれ、1歳で関西に移り住んだ。沖縄出身者として、在阪の団体から基地問題の「連帯アピール」を頼まれたことがある。その集会で、沖縄から戻った参加者がはつらつと現地の様子を語るのを見て疑念がわいた。「連帯を語るのなら、なぜ基地に苦しむ沖縄と同じように苦しまないのか」。主催者にただすと、依頼は途絶えた。

本土の平和運動にも首をかしげた。「全ての基地をなくす」と訴えながら、全国に占める沖縄の在日米軍基地の割合は、72年の復帰時より増えている。「自分たちの地域から基地をなくすという『正しい』主張を貫くため、沖縄の犠牲には黙っている」ように映る。

オスプレイの飛行訓練は、10月の沖縄配備の後になる。約150㍍の低高度を飛ぶ可能性もあり、各地で抗議が見込まれる。だが、仮にルートが変更されたら、その声は続くだろうか。金城さんは言う。「沖縄と連帯する。基地をなくす。それら主張は全部『正しい』。ならば（本土が）沖縄から引き取ったうえで基地をなくすのが筋ではないのか」

【平川哲也、写真も】

大阪はどうだった？

大城 立裕

沖縄からヤマトへのメッセージを書けという注文である。私がこういう注文を受けるのは、何度目だろう。そのつど真摯に応じてきたが、それで何がどれだけ変ったのだろう。いま「ブルータス、お前もか」と言いたい思いを禁じがたい。

こんどのメッセージのかずかずを、「普天間」の問題の最中に読んでヤマトの読者の感想を想像する。きっと「ふーん、なるほどね、沖縄も大変だな」と感じだけで終わるに違いないのだ。私はときにマスコミに取材をうけ、「こうしたらよいですか」と訊いてくるから、「それは、こうすれば、ああです」と答えている。海外の映画もマスコミが「沖縄は大変」と言うだけ。なんという、思いのない無責任なセンセーション——

大変はヤマトが自覚すべきことではないか。

サンフランシスコ平和条約を起点として、沖縄をアメリカのわがままな占領体制にゆだね、治外法権や法外な土地接収などの犠牲を負わせて、その上で本土だけが「独立」し、軍事費を助かって「高度成長」を謳歌したことを、なぜ沖縄に詫びないのか。「すみませんでした」と言えばよいのでしょうか」と訴えるべきではないのか。普天間基地をいつ、どこの誰がどうするか、政府としてもどうしようもないと言えば、それまでよいか、と開き直ってしまうべきではないか。それなのに、いつまでも沖縄が訴える側にまわされるのは、筋違いではないか。

以上が、私のヤマトへのメッセージである。

（おおしろ・たつひろ・作家）

論説委員室から　大阪にある沖縄

大阪市大正区は、住民の4分の1にあたる約1万7千人が沖縄出身者といわれ、「ウチナーンチュ（沖縄人）の街」とも呼ばれる。

今年は大正区の区制80周年と沖縄の祖国復帰40周年が重なり、「沖縄三大綱引き」の一つで400年の伝統をもつ与那原大綱曳を招致する。

この大正区で、沖縄の歴史や文化を若い世代に伝えようと地道に活動してきたのが、1985年にできた私設図書館「関西沖縄文庫」だ。

主宰するのは沖縄で生まれ、関西で育った「沖縄人2世」の金城馨さん(58)だ。5月15日の復帰記念日など節目節目で、ヤマト（本土）と沖縄の関係、そしてそこにある問題を見つめ続けてきた。

昨年の5・15には「復帰」の本質を考える集いを開いた。題して「1945＋1（プラスマイナス）66」。45年の沖縄戦を起点にすると、66年前に明治政府による琉球処分（廃藩置県）があり、66年後が昨年だった。

金城さんの目には復帰後も一貫して変わらない沖縄差別の現実は「琉球処分」が続いている状態に映る。

「どうすれば沖縄が日本と対等な関係を築けるのか」。その問いへの答えを求め、同文庫は今年、沖縄映画祭などを開く。金城さんの問題提起に「問われているのは私たちだ」と改めて思う。

〈大矢雅弘〉